
ギリシア独立戦争に対するByronとShelleyの反応と *Hellas* に見られる読者獲得の戦略¹⁾

藤 田 幸 広

イギリス・ロマン主義の詩人Percy Bysshe Shelley (1792 - 1822) はギリシア崇拝者であり、古代ギリシアの築いた文明に対して強い憧憬を抱いていた。また、彼は自由主義者として、当時スペインやイタリアで起きている革命運動に対して常に関心を持っていた。そんな彼にとって1821年3月のギリシア独立戦争の勃発は大きな衝撃をもたらした。当然のことながら、Shelleyはギリシアのオスマン・トルコに対する独立戦争を熱烈に支持し、詩劇*Hellas*を書くことによって自分なりのメッセージを読者に伝えようとした。本論では、この*Hellas*に見られる性質を「読者獲得の戦略」という観点から分析してみる。しかしその前に、イギリス・ロマン主義とギリシアとの関係において決して無視することのできない詩人George Gordon Byron (1788 - 1824) のギリシア観と独立戦争への反応について概観してみたい。なぜなら、Shelleyと友人関係でもあったByronとの比較によってShelleyのギリシア観や*Hellas*の性質がより明確に理解できるからである。

1. Byronとギリシア独立戦争²⁾

Byronは、「自由」という大儀をトルコの支配下にあるギリシアに捧げていたが、彼自身、自己矛盾がはらんでいた。すなわち古代ギリシア人と当時(Byronにとって現在) のギリシア人との大きな隔たりである。ギリシア独立

戦争とヨーロッパ諸国の自由主義者の反応についてRichard Cloggは次のように言っている。

蜂起の知らせが西欧に届くと、自由主義者たちは熱狂し、ほどなく親ギリシャ（フィレリネス）の義勇軍（最も著名なのは詩人バイロン）が解放運動に加わった。事態を古代ギリシャという理想像から眺めた者のなかには、当時のギリシャ人がペリクレス時代のアテネ市民のような尊敬すべき人物たちとは共通点がほとんどないのを知り、いち早く幻滅した者もいた。ギリシャ人の反乱を自分が気に入っている思想の実験場とみなした者もいれば、純然たる理想主義者もいた。もちろん軍事面で貴重な貢献をする者もいた。³⁾

Byronはかつて、いわゆる「グランドツアー」によってギリシアへ訪問した経験があったので、退廃した現在のギリシア人のことを直に知っていたのである。つまり、彼は古代ギリシアを崇拝しているのと同時に、当時のギリシア人を古代ギリシア人のように理想化することはなかった。また、そのころヨーロッパ諸国では、Metternichや神聖同盟による保守反動が起きており、各国の政府はギリシアでの反乱をヨーロッパ秩序への脅威と位置付けていた。そこでByronは、ギリシア情勢の問題の矛先をギリシア人ではなく、むしろヨーロッパ諸国に向けたのである。この古代ギリシアの栄光と現在のギリシア人の墮落という二つの側面をあえて割り切って考え、非難の対象を専制的なヨーロッパ諸国の政府に向けたバイロンの態度は、1818年7月から書き始められた*Don Juan*にも反映されている。

*Don Juan*の中でByronは、ヨーロッパ、特にイギリスの保守政策や横暴な対外政策に対して「風刺」という手段によって攻撃している。例えば、詩篇Ⅱの中ではイギリス人は牛肉と戦争が好きだといひ（156 stanza）、詩篇Ⅲの中では当時の王George IIIをトルコのサルタンになぞっている（79 stanza）。⁴⁾

しかし一方で、ギリシア人に対する彼の思いが書かれている部分もある。詩篇Ⅲにある（保守主義にくら替えした詩人Robert Southeyへの痛烈な風刺からなだれ込む）16連からなる「ギリシアの島々」(“The isles of Greece”)という抒情詩では、Byronがギリシアの島々に呼びかけ、「自由」という大儀を高らかに示している。⁹⁾ところが、第2連から第8連では、ペルシア戦争でのギリシア人の栄光を称えている一方、現在のギリシアにはその面影がないことを嘆いている。第6連の最後の2行「何のために詩人はここに残されたのか、ギリシア人には恥が、ギリシアには涙があるのに」(For what is left the poet here? / For Greeks a blush, for Greece a tear.)という言葉が示しているように、ギリシア人とギリシア本土を分離して描くことによって、自分の尊ぶギリシアの現在の状態に対して嘆きながらも、当のギリシア人に対しては不満を抱いてしまうというのがバイロンの正直な気持ちであろう。バイロンの風刺は弱者に向けられることはないが、この抒情的な部分では現在のギリシア人を嘆かざるをえなかった。もちろん、ここの部分にも西洋諸国に対する批判がある。

Trust not for freedom to the Franks;
They have a king who buys and sells.
In native swords and native ranks
The only hope of courage dwells,
But Turkish force and Latin fraud
Would break your shield, however broad. (14 stanza)

ここでの「フランク人」(the Franks)とは西ヨーロッパ人のことを指している。ヨーロッパ諸国の冷淡な態度、そしてギリシア人の墮落という二つの問題が襲うジレンマは、結果としてByron自らを徐々に実際的な手段へと動かしていく。Byronの関心がギリシア情勢により強く向けられるにつれ、*Don Juan*

からはロマンス的な描写が消えていき、例えば、詩篇Ⅶ、Ⅷにおけるイズマイルの交戦の描写では、Marquis de Castelnauの *Essai sur l'Histoire ancienne et moderne de la Nouvelle Russie* (『新ロシア古代近代史論』) に基づいた内容がジャーナリスティックな文体によって書かれている。

文体に変化が見え、さらには文学活動が減少していく中、Byronに一つの転機が訪れる。1823年4月、ギリシア独立を援助するロンドンの委員会の代表であるEdward Blaquiereが、ギリシア暫定政府の代表Andreas Luriettisを連れてByronを訪れる。彼らはByronに助言と援助を求めるが、その自分への信頼に感銘を受けたByronは、もしギリシア政府が自分を必要とするならば、自らギリシアに赴いてもいいとまで申し出る。そんな中、ギリシア本土は独立に向かうどころか、内部抗争によって逆に悪化の一途をたどっていた。その大きな原因は、オスマン・トルコではなく、ギリシア暫定政府内の行政側と立法側による派閥抗争であった。そもそも、ギリシア独立を阻む大きな障害は国内にあったのである。同年12月、この暫定政府内の派閥争いはさらに悪化し、ギリシア独立への道は閉ざされつつあった。そのような状況の中で、Byronは遂にギリシアに行くことを決意する。1823年12月30日、彼は一行を伴いメソロンギに向かって出発する。「自由」という大義を、詩の執筆ではなく具体的な行動によって示したのであった。翌年1月、メソロンギに着いたByronは、独立を訴えるPrince Alexander Mavrocordatoを支持する多くの軍人たちやメソロンギの市民に英雄として歓迎され、またギリシア政府の行政側と立法側からもギリシア独立の実現に貢献するものと絶大な支持を受ける。ところが、Byronが政府への助言や資金援助によって独立運動に熱意を示す一方、政府や軍隊の腐敗はそんな彼の態度を逆撫でしていった。このような状況の中、Byronはメソロンギの気候が合わず病気を患う。大きな孤独感を覚える中で彼の病状はますます悪化し、1824年4月19日、彼はギリシアで人生を終えることになる。

それではShelleyはどのようなギリシア観を持ち、どのような構想の下に

Hellas を書いたのか。そしてその性質はどのようなものなのか。

II. Shelleyのギリシア観と*Hellas*に見られる読者獲得の戦略

ShelleyはByronと違ってギリシアに行った経験が一度もなかった。したがって、彼のギリシア観は、概して自分が読んだ古代ギリシアに関する歴史書やHomerやPlatoなどの文学的作品によって形成されている。たしかに、彼は当時のギリシア情勢に関する情報を Prince Mavrocordatoなどのイタリアに亡命してきたギリシアの貴族たちとの会見、そして*The Examiner*などの刊行物や手紙などから得ていた。もちろんByronとの交流によって得た情報も少なくなかった。とはいえ、自分の生きている時代においても、Shelleyの思い描くギリシアが古代ギリシアの影響が大きかったことは否定できない。それは、ギリシア独立戦争が起こった前年の1820年12月からピサでギリシア人貴族との交流があったにもかかわらず、1821年2-3月に書かれた*A Defence of Poetry*の中に彼の古代ギリシアに対する崇拜が色濃く見えることから理解できる。*A Defence of Poetry*は単なる審美的な詩に関する論文ではなく、古代ギリシアが生んだ詩という芸術様式がどのように社会に良い影響をもたらしたかが書かれている。Shelleyは、高度な詩または芸術は政治や社会に大きく作用すると考えており、優れた芸術様式によって古代ギリシアは卓越した国家を形成したと説明している。ギリシア独立戦争は、Shelleyがこのようなギリシア崇拜の意識を持っている中で起こったのである。

しかし、戦争が始まった1821年という年は、Shelleyが周辺の問題によって詩を書く意欲と機会を失い始めていった時期であった。妻Maryとの不和、Byronと彼の愛人でMaryの義妹であるClaire Clairmontとの間に生まれたAllegraについての問題、そしてHoppner家に起こった自分とClaireとの隠し子スキャンダルなどである。しかし何よりも、自分の詩による社会改革の失敗とそこから起こる挫折感、また名声を博した詩人Byronの存在によって痛感する敗北感が、彼に詩人としての方向性を失わせていた。1821年8月16日、Maryに

宛てた手紙では、社会や現実から逃避したいとまで言っている。⁸⁾ それでも独立戦争という事件は、ギリシア崇拜者のShelleyに詩を書く衝動と活力を一時的に与えた。彼は戦争が勃発した同年10月にギリシア独立を訴えるべく詩劇*Hellas*を書き始め、3週間ほどで大部分を完成させたのである。

Shelleyは作品の序文でこの詩のことを「単なる即興」⁷⁾とっており、また1822年4月10日、John Gisborne宛の手紙の中で「十分な配慮」を持たず「今ではめったに訪れない熱意」⁸⁾を持って書いたと言っているが、ここに謙遜の意があるにしても、作品が短期間で書かれたことは事実であった。これは、現在起こっている事態への時事的な配慮もあって出版を急いだとも考えられるが、それに伴う彼の柔軟な姿勢もあったと思われる。本来Shelleyは読者を過剰に意識する詩人であり、詩やその序文の中で自己の芸術性を極端に強調することによって読者を一方的に選別することが多かった。しかし、*Hellas*にはそのような彼の態度があまり見られない。つまりこの作品に感じられるのは、今までのように審美的立場から自己弁護することによって読者を初めから排除してしまうのではなく、*Hellas*を読者の消費しやすい作品に仕上げることによって、ギリシア独立戦争というリアルタイムの出来事に一石を投じようとするShelleyの姿である。例えば、「詩的な読者でより選び抜かれた階級の高度に洗練された想像力」⁹⁾を対象に書かれた革命詩*Prometheus Unbound*では、自己の観念的立場が抽象的な理想世界の中で固持されているのに対し、*Hellas*においては何よりも読者の受容が優先されている。Shelleyは、Christ, Satan, そしてMahometが登場する「序詩」(“Prologue to *Hellas*”)を書いたが、自分の宗教観が色濃く反映されているこの部分が理由で出版が遅れることを恐れ、最終原稿から外してしまった。当時のイギリスにあった自由主義に対して弾圧的な検閲のためである。さらに、彼は出版者のCharles Ollierに原稿を送る際に、出版のときに不都合があれば部分的に削除してもいいとまで言っている。¹⁰⁾ *Hellas*において、Shelleyは柔軟な姿勢をもって、綿密な思想体系の構築よりも実利的な効果の生産に力を注いでい

る。次に、このような読者の獲得を狙った作品の特徴を、三つの点に注目して順に見ていく。

III. Aeschylusの*The Persian*の利用

*Hellas*は、Shelleyが「序文」で言っているように、ギリシア悲劇*The Persian*を原型にして書かれている。そこには*The Persian*の特質を十分に利用することによって、古代ギリシアの栄光を読者に想起させようとする詩人の意向が見られる。*The Persian*は、Aeschylusによって書かれ、紀元前472年にアテナイで上演された悲劇である。そのころ、ギリシアはペルシア戦争の最中であり、紀元前480年にはサラミスの海戦があった。つまり*The Persian*はそのとき実際に起こっている事件を題材にした、ギリシア悲劇の中でも変わった特徴を持つ作品となっている。この特徴は、ギリシア独立戦争の最中に劇を書こうとするShelleyにとって最適であったに違いない。また、*The Persian*はギリシアにとって敵国であったペルシアの首都スサの王宮で話が展開されている劇である。Shelleyはこのスタイルをそのまま採用し、*Hellas*の舞台をオスマン・トルコの首都コンスタンティノープルに設定している。これは、敵国の没落を描くことによって、ギリシア独立の希望を起こさせるという効果がある。だが、そこには同時に、文明や社会が衰退し没落する要因が戦争や専制的な王の失態にあるということも暗示されている。したがって、*The Persian*はギリシア独立の希望をもたらす楽観主義と戦争による殺戮への非難というShelleyの信念を二層構造にして示すことができる場を提供しているのである。その他に、劇の構成や対話の形式を見ても*Hellas*は*The Persian*と非常に類似している。

もちろん*Hellas*は*The Persian*の模倣に止まっているわけではなく、Shelley本来の手法が生かされている。まずは登場人物に関してだが、*The Persian*に出てくる亡き王Dariusの後Atossaは、息子Xerxesの思慮浅さが招いたギリシアに対するペルシアの劣勢を嘆き、国の暗い運命を案じて悲しみにくれる。

この行為は悲劇的な哀感を作っている。しかし *Hellas* に出てくるサルタン Mahmud は、Atossa の劇的な機能のみを受け、性格は横暴で独裁的な征服者である。つまり Mahmud は内面において Atossa の息子 Xerxes を受け継いだことになる。Shelley は、Mahmud の中に Atossa の劇的機能と Xerxes の性格を一本化させることによって悪の象徴化に徹したのではないか。また、この象徴化によってイスラム教が悪と結び付けられ、キリスト教とイスラム教の宗教的対立が前景化することになる。¹¹⁾ こうすることによって Shelley は、ギリシア独立がキリスト教徒全体にとっての問題であることを、読み手に意識させているのかもしれない。また劇的な役割を考えれば、Mahmud は悲劇的要素を奪っており、逆にギリシアの勝利を予感させる楽観的雰囲気を助長させているのである。

また、作品中のコーラスにおいても Shelley は独自の利用をしている。 *The Persian* のコロスは、Xerxes が遠征中、残された后 Atossa に助言をする長老たちによって構成されている。コロスは、Atossa や後に帰還する Xerxes との対話に加わりつつ、ペルシアの悲劇的な行く末を予兆し、その場の哀感を増幅させるという役割を果たしている。一方、 *The Persian* に登場するコーラスは、捕らわれたギリシア人の女性たちによって構成されている。

The world's great age begins anew,
The golden years return,
The earth doth like a snake renew
Her winter weeds outworn;
Heaven smiles, and faiths and empires gleam
Like wrecks of a dissolving dream. (1060-65)¹²⁾

Shelley はこのコーラスの中に、自由の啓示、楽観的無常観、そしてキリスト教的な博愛などを彼特有の抒情表現と融合させながら表現している。¹³⁾ 悪

の象徴であるMahmudが悲劇性を既に奪っているのに加えて、作品の雰囲気はこのコーラスによってギリシア独立に希望を与える喜劇的なものへと反転されるのである。

IV. *Hellas*が英語で書かれた理由

*Hellas*はPrince Mavrocordatoに捧げられ、また民族の解放と独立を目指すギリシア人に向けられた作品である。しかし、なぜ英語で書かれ、そしてロンドンで出版されたのか。この問題は詩人がイギリス人であるだけに軽視されがちであるが、実は彼が当時のギリシア人をどう見ていたかに重要な関係がある。ギリシア独立戦争では多くのギリシア人がトルコ人によって殺されたが、同様にギリシア人もトルコ人に対して多くの略奪や虐殺を行った。Michael Erkelenzは、Shelleyは*The Examiner*の他に*Galighani's Messenger*を購入して、戦争中のギリシア人の下等で残虐な行為を知っていたと主張している。¹⁴⁾ またByronからも当時のギリシア人の墮落について聞いていたに違いない。もしこのような事実を知っていたならば、理想主義的なフィルヘレニズムに走るShelleyの態度は非難されるかもしれない。しかし、Shelleyがギリシア人の墮落を認識していたならば、なおさら*Hellas*の舞台設定を*The Persian*に真似たことに意義があるのではないか。なぜなら、戦争によるオスマン・トルコの没落を描くことによって、Shelleyは古代ギリシアが没落した原因をも想起させているからである。そこには平和や博愛といったShelleyの信念も暗示されている。つまり、彼の戦略としては、ギリシア人の戦意を鼓舞させ、そして血生臭い戦闘を長引かせるのではなく、*Hellas*の序文で彼が「我々は皆ギリシア人である」¹⁵⁾と言っているように、いわば政治と文明の聖地であるギリシアにいる同胞の危機をヨーロッパ諸国に伝えることこそが最良の策であったのではないだろうか。ヨーロッパ諸国の不干渉に対するShelleyの痛切な非難は、「序文」の後半部や劇中の「外の声」(Voice Without)にも直接的に見て取れる。しかし、何よりも詩によって解放と自由の精神をヨー

ロッパの市民に伝えることが重要であった。ヨーロッパの市民が政府を動か
し、さらには各国政府の外交的圧力がオスマン・トルコに加わることによっ
てギリシア独立が実現されるというこの論法は、Byronの詩にある戦略と類
似している。そしてまたShelleyも、この独立戦争に対するヨーロッパの関心
を通じて、ギリシア人自身も自分たちの持つべき気高い信念を認識するべき
だと考えたのではないだろうか。したがって*Hellas*を英語で書くということ
は、平和的に、また間接的に、ギリシア独立を実現させるための手段であっ
たと考えられる。

V. Ahasuerus再登場の意味

最後に注目してみるのには、作品に登場する「さまよえるユダヤ人」(The
Wondering Jew) Ahasuerusに関してである。Ahasuerusは、1813年、*Hellas*執筆
の約10年前にShelleyが書いた革命詩*Queen Mab*に登場していたキャラクター
である。*Queen Mab* 詩篇VIIで、Ahasuerusは当時のShelleyの思想を反映した無
神論的な予言者として登場し、作品全体の支柱となる役割を果たしている。
しかし*Hellas*のAhasuerusは「宗教的な罪」¹⁶⁾を象徴してはいるが、作品全体
に占める役割とその語りの内容の重要性は*Queen Mab*のときと比べてほと
んどない。むしろ彼は、Mahomet IIの幻影を呼ぶための劇的な道具として使
われている。ShelleyがAhasuerusを再び登場させた理由は他に考えられない
だろうか。

ここで注目すべき出来事を取り上げたい。それは1821年5月21日、ロンド
ンでWilliam Clarkによる*Queen Mab*の海賊版が出版されたことである。*Queen
Mab*は、Shelleyの前妻Harriet Westbrookとの間に生まれた子どもの親権を争
う裁判で、Shelleyが無神論者であることを示す証拠として取り沙汰され、あ
る程度話題にはなっていたが、これがきっかけで海賊版の流出は促進される
ことになる。*Queen Mab*はいくつかの雑誌に取り上げられ、Shelleyの他の詩
にはなかった社会的な関心を得たのであった。作品に対して急進主義の雑誌

は賞賛し、自由主義の雑誌はあえて賞賛を控え、また保守主義の雑誌は非難するという反応を示したが、*Queen Mab*が大きく注目されたのは事実である。¹⁷⁾ この事実が*Hellas*執筆に何らかの影響を与えたとすれば、Ahasuerusの再登場である。

1821年6月22日、Shelleyは*The Examiner*編集者Leigh Hunt宛の手紙の中で、自ら*Queen Mab*の社会における有害性を指摘し、この作品が出版されことを悔いている。¹⁸⁾ 手紙という媒体はたとえ本人が書いたものとはいえ、書き手の真意を表すものなのか、それとも宛てた相手に対するパフォーマンスなのか断定するのは非常に困難である。つまり、親権を争う際に無神論者の証拠としてこの詩を差し出されたことに対する嫌悪感なのか。また、作品の中でキリストを非難したことが現在の思想と矛盾していることから内容を否定しているのか。それとも、自分の作品が(*The Cenci*を除いて)評価されるという稀に見る事態に対して喜びを感じつつも、あえて過去の作品を得意げに葬り去っているのか。現にShelleyは*Queen Mab*に嫌悪感を示す一方で、先のLeigh Hunt宛の手紙と同じ内容を*The Examiner*だけでなく*The Morning Chronicle*にも掲載させ、¹⁹⁾ また1821年9月14日、Horace Smith宛の手紙の中で、Clarkの海賊版を見たいと催促までしている。²⁰⁾ (この手紙でギリシア独立戦争についても触れられていることは単なる偶然とは思えない。) これらの事実から、*Queen Mab*のAhasuerusを*Hellas*の中で再登場させることが、批評家や読者に注目してもらうための一つの方策であったと考えてもおかしくはない。

結

*Hellas*を一ヶ月にも満たない期間で完成させたShelleyは、早い時期に出版することを出版者のOllierに催促しているが、結局*Hellas*が出版されたのは1822年の春になってのことだった。彼の作品はByronの行動ほど大きな影響をもたらすことはなかった。*Hellas*を取り上げた雑誌はたった一つに過ぎず、しかもその内容は敵意に満ちたものだった。*Hellas*を「非難するところはた

くさんあっても賞賛するところはない」と、またShelleyに対しては「読者の一般性に対してあまりにも不明瞭で難解な」と評したのは、*The General Weekly Register of News, Literature, Law, Politics, and Commerce* という短命に終わった雑誌である。²¹⁾ たとえHellasが難解であったとしても、はたしてShelleyの戦略は間違っていたのであろうか。彼がしたような自由主義者たちによる運動の方向性は決して無駄ではなかったと思われる。なぜなら、独立戦争に介入すべきという世論的圧力は、ギリシア情勢に対して冷淡な態度を取っていた神聖同盟諸国の政府を徐々に動かしていったからである。ShelleyとByronが既に亡くなっている1827年、イギリスとフランスの艦隊はナヴァリノでトルコの海軍に参戦し、ロシアは戦争を宣言するという大きな変化が訪れるのであった。

注

- 1) 本論は日本シェリー研究センター第11回大会のシンポジウムで発表した原稿を加筆・修正したものである。
- 2) Byronの伝記的な記述に関しては、Leslie A. Marchand, *Byron: A Biography*, 3 vols. (New York: Knopf, 1957) を参照した。
- 3) リチャード・クログ『ギリシャ近現代史』高久 暁 訳（新評論, 1998）31-32。
- 4) *Don Juan*からの引用は、Lord Byron, *Don Juan*, ed. T. G. Steffan, E. Steffan and W. W. Pratt (London: Penguin, 1973) による。
- 5) この箇所は、最初のギリシア訪問を元に書かれた*Childe Harold's Pilgrimage* の詩篇IIの「汚れなきギリシアよ」(693; "Fair Greece!") から始まる部分を想起させる。引用は、Lord Byron, *Selected Poems*, ed. Susan J. Wolfson and Peter J. Manning (London: Penguin, 1996) による。
- 6) Percy Bysshe Shelley, *The Letters of Percy Bysshe Shelley*, ed. Frederick L. Jones, 2vols. (Oxford: Clarendon P, 1964) 2: 339参照。

- 7) Percy Bysshe Shelley, *Shelley's Poetry and Prose*, ed. Donald H. Reiman and Neil Faistat (New York: Norton, 2002) 430.
- 8) *Letters* 2: 406.
- 9) *Poetry and Prose* 209.
- 10) 1821年11月11日, Charles Ollier宛の手紙 (*Letters* 2: 365) 参照。
- 11) Kenneth Neill Cameronは, Shelleyのイスラム教に対する非難の主な理由は, ハーレム制度に見られる「女性の隷属」と言っている。その根拠に, *Hellas* の中で後宮にいるギリシア人の女性がコーラスを構成していることを挙げている。Kenneth Neill Cameron, *Shelley: The Golden Years* (Cambridge: Harvard UP, 1974) 385参照。
- 12) *Hellas* からの引用は*Poetry and Prose*による。引用の後, 括弧内には行数が示してある。
- 13) Newman Ivey Whiteは, Shelleyが*Hellas* 執筆の時期に (先ほど引用した) *Jon Juan* の詩篇Ⅲを読んでいることから, *Hellas* のコーラスと「ギリシアの島々」との類似性について指摘している。Newman Ivey White, *Shelley*, 2 vols (London: Secker, Warburg, 1947) 2: 331参照。
- 14) Michael Erkelenz, "Inspecting the Tragedy of Empire: Shelley's *Hellas* and Aeschylus' *Persians*," *Philological Quarterly* 76 (1997): 323-25参照。
- 15) *Poetry and Prose* 431.
- 16) Richard Holmes, *Shelley: The Pursuit* (London: Flamingo, 1995) 678.
- 17) 当時の*Queen Mab*に対する書評に関しては James E. Barcus ed., *Shelley: The Critical Heritage* (London: Routledge, Paul, 1975) 70-94並びにLewis M. Schwartz, "Two New Contemporary Reviews of Shelley's *Queen Mab*," *Keats-Shelley Journal* 19 (1970): 77-85を参照。
- 18) *Letters* 2: 304-05
- 19) *The Examiner* には1821年7月15日, *The Morning Chronicle* にはその翌日16日に掲載。

20) *Letters 2*: 350.

21) *The Critical Heritage* 317.